

カ ナ ダ 雑 記

高 橋 武 雄

1. 序

第 21 回純正応用化学国際連合総会と同連合主催の第 18 回国際会議とが 8 月上旬カナダのモントリオールで開催された。幸い同連合 (IUPAC) の委員として出席し、あわせてその前後においてカナダおよびアメリカの各地を訪問する機会を得た。ここにカナダでの概要を記する。7 月 16 日羽田出発、ホノルル、18 日ロサンゼルス、21 日サンフランシスコ、24 日シアトル、26 日バンクーバー、28 日バンフ、30 日トロント、31 日モントリオール、8 月 12 日ボストン、13 日ニューハンプトン、18 日ボストン、22 日ニューヨーク、25 日フィラデルフィア、28 日ウィルミントン、30 日ワシントン、9 月 2 日ピッツバーグ、6 日シカゴ、12 日ロサンゼルス、14 日羽田という極めてあわただしい 2 カ月の旅程で、当然見聞の表面的皮相的であることをまぬかれなかったが、幸い、世界の多くの化学者と旧交を温め、あるいは新交を結ぶことを得たことは最大の喜びと考えている。なお筆者の専門分野が分析化学であるためその関係の見聞記が主であることをお断りする。

2. 化学連合第 21 回総会

純正応用化学連合 (International Union of Pure and Applied Chemistry) の総会 (Conference) は 7 月 31 日から 8 月 4 日までモントリオール大学の Social Centre で行なわれた。連合本部の Executive Committee, Bureau, Council などのほか、物理化学・無機化学・有機化学・分析化学・応用化学の各部においても Section Committee, Commission などの会合がその間において開催された。私は 2 日午後の Council に日本学術会議代表の一人として水島三一郎 (東大名誉教授)、太泰康光 (北大教授)、野田稻吉 (名大教授)、田中信行 (東北

大教授)、関集三 (阪大教授) の諸氏とともに出席した。重要な議決事項は、原子量の規準を従来の酸素 16 から炭素 12 に変更することと、連合内の Commission, Division の委員数を従来の 10 名から 8 名に減少すること



写真 2 IUPAC 総会議場
(ソシアル・センターの大講堂)



写真 3 分析化学委員会 (右より Kortüm, Gordon, Belcher, Charlot)

であった。会長の W. A. Noyes (米国ロチェスター大学教授) の練達せる司会ぶりには感心した。3 日午前午後には分析化学部会の委員会があり、会長 R. Belcher (バーミンガム大学教授)、副会長 G. Charlot (パリ応用物理化学大学教授)、幹事 L. Gordon (ケース工科大学教授) のほか、委員の I. P. Alimarin (ソ連学士院地球および分析化学研究所教授)、G. Kortüm (チュービンゲン大学教授)、A. J. Ringbom (フィンランド科学院教授)、P. W. West (ルイジアナ州立大学教授) と卓を囲んだ。新委員 (私の後任) の田中信行教授も同席した。前回委員会 (1959 年) の報告、総会に提出する報告、次期委員の承認、委員選出法、各 Commission よりの報告、IUPAC の出版方針など Belcher 教授より説明があったあと、さらに Kortüm 教授から螢光スペクトル分析法の最新の調査報告、Alimarin 教授から国際会議

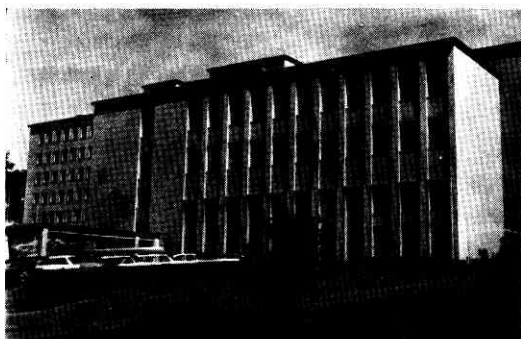


写真 1 IUPAC 総会会場
(モントリオール大学ソシアル・センター)

のプログラム作成に関する意見、各 Commission の次年度予算案、錯滴定法の名称を Complexometric Titration とすることなどが主な話題となった。なお次期会長に予定されていた G. Duyckaerts (リエージュ大学教授) が

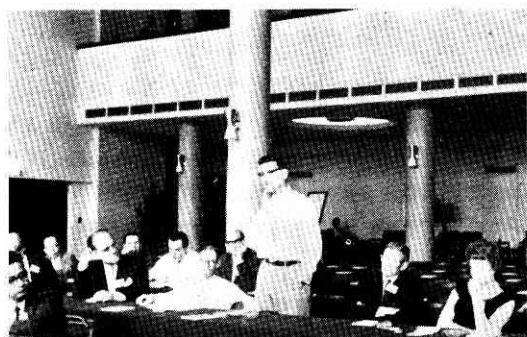


写真4 分析化学総会 (立っている人は Prof. Schwarzenbach)

一身上の都合で辞退されたのでその次期会長の選定は Belcher, Charlott, Gordon 3氏に一任した。翌4日午後、分析化学部総会が Commission Member を加えて開催され、Belcher 教授より次期会長に H. Malissa (ウイン工科大学教授) が推せんされ、新委員と共に承認された。

さらに5日午前に再び Council が開催され各国代表約 200 名出席、会長 Noyes 教授の司会の下に向後の IUPAC の活躍のためには相当の資金を獲得する必要から応用化学部会の拡大によって産業界への奉仕に努力することなどが議され、その具体化については向後研究することとなった。この席での最重要議題は満期退任する4名の Bureau メンバーの後任選出であって、各国割当の投票数(日本6票)による選挙が各候補者について行なわれた。満期退任の水島教授の後任には日本側では太泰教授を推したが、ソ連代表の執拗な反対演説(各国にメンバーを回すこと)の結果、数票の差でインドの Govindachari 教授の当選と決定した。予備工作が不十分であったことももちろん日本側の敗因であって、総会に初年生の日本代表(水島教授を除いて)がいかなともなし得ないところであった。

なお3日夕 McGill 大学内の Redpath Hall で IUPAC



写真5 マクギル大学物理学教室

の米国代表の招待によるパーティが催された。典雅荘麗なホールは世界各国からの化学者の一大懇親場となり夫人令嬢を交えてなごやかな空気は堂に満ちまことに快い夕であった。

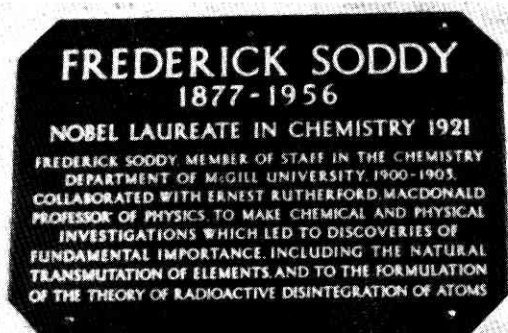


写真6 マクギル大学化学教室廊下の Soddy の在学記念額



写真7 マクギル大学構内野外休憩場(中央、IUPAC President, Noyes)

以上のような国際会議において言語は最も大切であって、アメリカ、ドイツ、スイス、カナダなどの代表は英、独、仏の3国語をもって同一趣旨をくりかえし説明して出席者の大部分に理解させるように努めていた。しかし、イギリス、フランスなどの代表は自国語一点張りで、ことに仏語のみでは多く理解されないのではないかと思う。ソ連代表のなかには英語が不得手の人も相当あるようにみうけられた。

3. 第18回化学国際会議

第18回国際会議は8月6日(日)15時 Queen Elizabeth Hotel の大広間で開会された。会議組織委員長、郵政大臣、ケベック州天然資源局長官の英・仏両国語の祝辞、IUPAC 会長、Noyes 教授の挨拶のあと英国リーズ大学の F. S. Dainton 教授の特別講演 "New Horizons in Physical Chemistry" が行なわれた。最近の化学反応論の進歩についての講演であった。

かくて翌7日から12日まで6日間研究発表、特別講演、工場見学など多彩な行事が世界各国から参集した化学者のために催された。各国別参加者数を配布された参加者名簿から数えると、

| | | | | | |
|------|-------|--------|-----|---------|----|
| アメリカ | 1450名 | スウェーデン | 18名 | オーストラリア | 9名 |
| カナダ | 710 | ベルギー | 17 | フィンランド | 8 |
| イギリス | 87 | ソ連 | 16 | チェコ | 8 |
| フランス | 69 | スイス | 14 | ノルウェー | 6 |
| ドイツ | 66 | イスラエル | 14 | アイルランド | 5 |
| 日本 | 29 | オーストリア | 12 | ブラジル | 4 |
| イタリア | 28 | オランダ | 10 | ポーランド | 2 |

主催地のカナダ、アメリカからの参加数の多いのは当然として、また共産圏域のソ連その他の比較的少ないのは例外にして上表を見ると、化学研究の活発の程度をなにか暗示しているようにも思われる。

さて「分子構造・反応性」、「固体状態」、「高温下の化学的・熱力学的性質」、「原子核化学」はマクギル大学、「電気化学」、「高分子重合物」、「分析化学」、「冶金化学」、「木材化学」はクイン・エリザベス・ホテル、「有機化学」はモントリオール大学でそれぞれ講演が行なわれた。そのうち「木材化学」と「有機化学」とはシンポジウム形式で行なわれ研究発表はなく権威ある総合講演が集められた。



写真 8 分析化学研究発表会場（討論中）

この国際会議における総合講演は Plenary lecture 5, Sessional lecture 71 を数え、世界の多数の碩学の講演を集めたことはまことに IUPAC 国際会議として未曾有の壮観といわねばならない。しかしそのうちで日本人はただ 1 名、堀内寿郎教授（北大）のみであることはまたはなはだ淋しい次第である。日本の化学研究の今日の隆盛を思えば了解にやささか苦しいのである。このようなことは主催国側（今回はカナダ）の一方的選定を認める IUPAC の規約から生じたものであって、IUPAC 内の一部ではその規則の改正（IUPAC 側の意見の入るよう）の必要が叫ばれている。

これらと同時にモントリオール周辺の工場見学、同伴家族のための観光なども行なわれた。私は 7 日の分析化学に出席したが午前中は金属中のガス分析に関するもので宗宮尚行博士（東大名誉教授）の真空溶融法の改良に関する研究は聴衆に多大の興味をおこし相当討論が活発に行なわれた。

午後の英国 Harwell 原子力研究所の G. W. C. Milner の「金属および鉱石分析における電気化学的方法」の総説は主として矩形波ポーラログラフィとクーロメトリー

とに関するもので、私には興味深かった。またワルソウ大学の W. Kemula 教授の懸吊型水銀電極ポーラログラフィに関する研究は教授の流暢な英語と豊富なスライドとによって感銘深いものがあった。

翌 8 日は工場見学に当て、午前中は Laurentide Chemicals & Sulphur Ltd. にゆく。これは石油精製廃ガスからアミンで H_2S を分離し適量の空気で燃焼させ、次の反応を行なわせて硫黄を回収する工場である（日産 100 t）。



燃焼熱は廃熱ボイラーで回収され、また未反応の H_2S はさらに反応床で触媒的に酸化させて硫黄を捕収する。

次に B. A. Shawinigan Ltd. (British American Oil Co. Ltd. と Shawinigan Chemicals Ltd. との合同会社) にゆく。ここでは Cumene 法でベンゾールとプロピレンとから石炭酸とアセトンとを製造していて、西欧における最初の Cumene 法工場との由である。石炭酸日産 120,000 lb., アセトン 90,000 lb. とのこと。

午後 Ayerst, McKenna & Harrison Ltd. にゆく。昨年新築の研究所は全部完全にエアー・コンディショニングされ、有機化学、動物生理、動物飼養試験などの数多くの実験室は最新式で、実験台にスチーム口があって湯煎などに利用されていた。

さらに 10 日午前「木材化学シンポジウム」でエジンバラ大学の E. L. Hirst 教授の「ヘミセルローズの化学構造」をきく。

各種植物体中のヘミセルローズの化学構造を各論的に教授の多年の研究から明快に説明する教授の悠々迫らざる英国紳士の風格を見て、5 年前エジンバラ大学を訪ねたときを思い出して感慨を新たにしたり。午後は「分析化学」で、チェコの R. Pribil 教授の「In および Ga の新分析反応」をきく。それら金属のポーラログラフ分析法における錯化剤の研究を総説したものであるが、昨年来日したときと同じように辺幅を飾らない風采と卒直な英語とに共感を新たにしたり。

そのあと私は「In の分析ならびに In 中の微量物の分析」について、ついで三角省三氏（九大教授）は「Eu イオンの炭酸塩水溶液中での性質ならびにその微量のポーラログラフ分析」についてそれぞれ研究発表した。なお同日タクイン・エリザベス・ホテルの大サロンで約 1,000 名参集して盛大な晩さん会が催され、A. M. Sugden（英国ケンブリッジ大学）、古川周三（京大教授）、田中胤三（九大教授）などと卓を囲んだ。

11 日午前、郊外 Point Clair にある Pulp & Paper Research Institute of Canada を見学する。パルプ原木の肥効試験から始まってパルプ製造試験設備、繊維試験設備に至るまで完備され、ことに製紙関係の試験機は同所の設計試作したものが多く、電子顕微鏡は英国ケン

ブリッジ大学製作、Vicker 顕微鏡はドイツ製であった。午後は McMasterville にある Canadian Industries Ltd. の研究所を見学した。有機化学、高分子化学、化学工学、分析化学、物理化学、無機化学の諸方面の開発的基礎研究を行なっていて、ことに高分子の粘性、滲透圧などの物理的研究が多いようにみうけられた。

最終日(12日)午前、チューリッヒ工科大学の G. Schwarzenbach の「無機性分子ならびにイオンからプロトン付加あるいは除去によって生成する不安定物質」、ならびにソ連科学院の N. N. Semenov 教授の「低温度下の化学反応とエネルギー移動」の二つの総合講演をもって第 18 回 IUPAC 国際会議の終幕は下された。

4. モントリオール

セントローレンス川で囲まれた中の島を占めるこのカナダ第一の大都市は仏語系住民が 60% 以上であたかもパリの観がある。荘麗を極めるノートルダム寺院はパリ、セヌ河畔のノートルダム寺院に比べて内部の華麗さにおいてまさるとも劣るものではない。また白聖宏大なセント・ジョセフ寺院からの展望は、パリのモンマルト

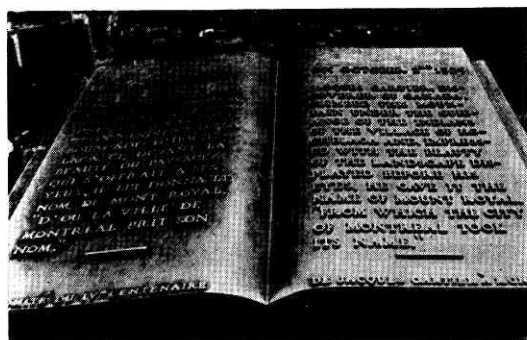


写真9 モントリオールのマウント
ローヤル上の記念碑

ルの丘に立つサクレ・クール寺院からの展望に比すべくまことに雄大である。市の中央マウント・ローヤル公園に立てば、悠々と流れるセントローレンスを眼下にながめることができる。1535年10月カナダの発見者 Jacques Cartier はこの丘上に立ち眼前に展開した雄大な風景に驚嘆してこの地を Mont Royal と命名、モントリオール (Mont Real) の起源をなしたといわれている。

私はこの地に7月31日から8月12日まで前記の会議期間滞在したが、おりからの暑熱をさほど感ずることもなく、快適な日日を暮らすことができた。その間観光バスに乗り、ろう人形の Wax Musium、荘麗なノートルダム寺院などを見物しあるいは名物の馬車に乗ってマウント・ローヤルの丘に上ったり、また市内バスにて広大な温室をもつ植物園を訪ねたりした。9日夕 McGill 大学構内で催された有名なカナダ騎馬警官隊の妙技は誠に印象的であった。しかしこれらを叙述するのは凡筆のなし得ないところ、ここに割愛するほかはない。ただここ

に今度の国際会議場として思い出深い二大学について若干記したい。

カナダ最古の大学である McGill 大学は 1821 年勅許によって創立され、モントリオールの大毛皮商ジェームス・マクギルは £10,000 と 46 エーカーの地とを寄付したが、実際に学舎の建設をみたのは 1843 年、最初の学士を出したのは 1849 年といわれている。William Dawson 卿が 1855 年学長に就任した当時は学生わずかに 80 名に過ぎなかったが、30 年後卿の退職の時には数千の学生を擁しかつ国際的名声をもつ大学となり、1884 年には女子学生をも収容するほどになった。1890 年代に至って、Redpath 博物館・図書館・物理・工学・化学・採鉱の諸教室が建てられ、大学院学生を収容し大学の活気大いにみなぎり原子核研究における Ernest Rutherford と Frederick Soddy との不朽の研究はこの内に生まれた。この大学において化学教育が Arts Curriculum に入ったのは 1855 年、化学に関する理学士の出たのは 1872 年である。当時は有機化学が主であったが、1883 年生理化学(現在の生化学の母体)、1894 年物理化学がとり入れられて化学研究は活発となった。さらに 1902 年冶金教室、1907 年農芸化学教室、1922 年生化学教室、1946 年化学工学教室が設けられた。

8月10日午前、わたくしはこの大学の中を徜徉した。純英国風の典雅荘重な Moser Hall 大講堂でも、また近代的な明かるい Physical Science Centre の Auditorium でも研究発表と討論とが活発に行なわれていた。かつてラザフォードのいた物理教室のほの暗い廊下には百年の輝かしい歴史を物語る多数の研究者の写真が掲げられ、古い化学教室にもソデー教授の業績を記念する銅額がその栄光を誇示していた。

人類学、地質学および動物学に関する多数の蒐集品を陳列している Redpath 博物館は W. Dawson 卿以来 100 年の努力結晶の成果を表示している。広い緑の芝生、亭々として空高くそびえる巨木の林、ともに静かな学的雰囲気をつくるのにふさわしい。

モントリオール大学はカソリック教派の大学として建てられたもので 1878 年神学部および法学部の開設に始まり、ついで医学部・芸術学部を設けたが、1920 年にいたって理学・文学・社会学・経済学・政治学・哲学の諸教室を含むようになってから、市の中心の Saint-Denis 街から現在の Mont-Royal への移転計画が立てられ、1928 年建設に着工、1943 年現在の新学舎がなった。このマウント・ローヤルの丘にそびえる白聖の美しい大学は、マクギル大学に比して、ことに自然科学系教室の歴史は浅いとはいえ、俗塵を絶つ美しい自然に囲まれている。校内の Social Centre はまた清楚な白聖の建物でその中には大講堂・会議室・談話室・大食堂・カフェテリアなどがあり、この中において IUPAC の第 21 回

総会が開かれたのである。またそれに隣接した白壁の建物、Residence は宿泊にあてられている。私はこの建物に 12 日間滞在したので、この学園の思い出はひとしお深いものがある。

モンリオール滞在中、多くの市営バスを利用した。このバスの運転系統は循環式でループの形式になっているので、左回りと右回りの 2 線が同じ街を走り、またバスの乗換えが相当多い。乗車代は 1 回 20 セント、2 枚券 30 セント。運転手は車掌の役をも兼ねていて彼の右側のコイン納箱に乗客は乗車と同時に 20 セントを入れる。また英、仏、両国語が用いられているので、運転手も両国語を弁ずる。カナダ国民はもちろんイギリス人でもなく、またフランス人でもなく、両国語を話す別個の国民である。このようなことはスイスにも例があり、国語と国家とがかならずしも一体の必要がないことを語っている。これと反対にアメリカは多数の民族の集合体であるが、米語（英語）がもっぱらであって、フランス系も、日本系も、スペイン系も、インディアンも、黒人もすべて今日米語を話すようになっている。国家的にみればアメリカ式が都合よいことはもちろんであるが、カナダ国民のような 2 カ国語を話す国民は、あまり苦労することもなく自然と 2 カ国語に練達できるのでその点ではカナダ国民の方が米国民よりも国際的活躍の上ではより恵まれているともいえる。

5. カナダの都市

カナダ国の首都はオタワでモンリオールから西南約 2 時間の車程にある。9 日 9 時オタワ行き急行バスに乗って観光に出かけた。車はオタワ川北岸の坦々たる舗装道路を快適に走る。農牧地帯であるが、通過する小村には近代的なホテルやレストランを見る。11 時半オタワ着。それから観光バスにて市内を一巡する。オタワ川畔の台地に立つ国会議事堂は誠に堂々たるものでその中央にある平和塔に登って（エレベーターを 2 回乗換え）塔頂の展望台に立てばオタワ川とリドー川を挟んで美しい森と家々とが散在し人工と自然との調和は美しい。塔の基部には戦没戦士の祭壇が設けられ勇士の名は氏名録中に金文字で記載され、まさに千歳の後まで留められている。堂内を観光のお上りさんの後について歩いて議場、図書館を見る。図書館は八角形の室で中心に美しい白い大理石のビクトリア女王の立身が立ち周囲の書架にギッシリと詰められた書籍の背金文字とあいまって誠に華麗のいたりである。

オタワ川に臨むロッククリフ公園にある政府高官の官邸、各国大使館などや、リドー運河畔の花園、ドウ湖畔の静かな風物など強く記憶に残っている。午後 3 時 45 分発の急行バスにてなお日光の輝く 6 時半モンリオールに着いた。

カナダの工業地域は Huron, Erie, Ontario の 3 湖に

囲まれたところの地域であって、いわゆる Niagara Peninsula である。その中心はトロント、ハミルトン、ウインザーである。トロントはカナダ第二の大都市でオンタリオ湖に面し水陸交通の便に恵まれている。7 月 30 日夕トロント空港につき翌 31 日この市を見物した。市内の工場地域を歩いてその清潔なことには羨望の感を深くした。多くはレンガ造の 3~4 階の建物であるが、道路に面したところにはトラックなどの製品が陳列されていてまったく工場地帯の内にあることを忘れしめた。商店街は赤レンガ造の古風な外観をもち、静かな住宅街を

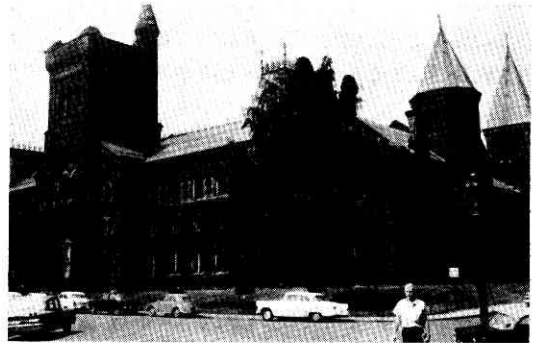


写真 10 トロント大学構内

歩けばオートバイの騒音はまったくなく、幼女たちが路上で人形遊びをしている平和な姿を見る。観光バスで案内された Sunnybrook War Veterans 病院の巨大な建物、古風蒼然たるオンタリオ州議事堂、トロント大学、市庁など古都の趣が強く感ぜられる。中心地の Bay Street, Queen Street などとところどころ古い教会を見るにつけ、カソリック教の強い信仰が今日の大工業都市トロントにもいきいきとみなぎっていることを感じた。

製鉄工業のハミルトン、自動車工業のウインザーもカナダの重要な工業都市だが遂に訪ねる機会がなかった。

木材・パルプ製紙工業はカナダの重要工業であるが、その原因はいうまでもなく、豊富な森林資源をもっているからである。その中心は東のケベック州と西のブリチッシュ・コロンビア州とである。木材の集散地であり、天然の良港であるバンクーバーはブリチッシュ・コロンビア州の首府で古くから漁業関係の日本の移住民が多い。



写真 11 バンクーバーの公衆図書館

7月26日シアトルから空路でこの地につき、28日まで滞在した。大太平洋航路の巨船が眼前を通行する Stanley 公園、美しい花壇と雄大な市街展望の Queen Elizabeth 公園、広大な地域に建てられた宏大なブリチッシュ・コロンビア大学、その構内に太平洋の平和を念願された新渡戸稲造博士の功績記念の日本庭園、殷賑を極める中華街、近代的なすばらしい Queen Elizabeth 劇場、近代的な Public Library など懐かしい思い出である。

これらの都市は美しい自然とよく調和した新古の対照によっていっそう奥ゆかしさを増している。新しきもののみではそのよさはさほど感ぜられなく、古色豊かな存在の点在こそ近代性の深化に欠くことができない。カナダ人の心温まる人のよさはこれらのどの都市でも十分に感じとられる。

6. カナダの自然

カナダは山紫水明、その美しい自然は何人もを魅するものがある。国内には多数の国立公園が散在しているが、その内最も魅力あるものは壮大なロッキー山である。ここにその旅記を記することにする。7月28日朝バンクーバー空港を出発し11時半 Calgary 空港につき、午後1時 Banff 行きのバスに乗る。視野は草原からエゾ、トド、白樺の林、豪快な岩山と変わり、午後2時半、Cascade, Sulphur などの山々に囲まれた清楚な町 Banff についた。午後4時発の観光バスにてその付近を見物する。バッファローの放牧せる Buffalo Paddocks, 清流 Bow 川を眼下に見る Hoodoos, Tunnel Mountain などを巡って美しい花壇 Cascade Rock Garden を見た。この静かな町に一夜を明かし朝手を切るような冷たい水で洗顔したときの記憶は永久に忘れることはない。午前8時半バスにてさらに山奥へ向かった。約1時間でルイス湖につく。豪壮な Chateau Lake Louise の庭の前面に広がるルイス湖の水は碧く、湖を隔てて氷河を望む。たちまちにして霧雨となり周囲の山々は姿を没す。またしばらくにして山頂が雲の上に姿を現わす。この変幻極まりない自然は美の極致というも過言でない。さらに車を走らせてモーレン湖にゆく。万古の雪をいただく山々の間に囲まれたこの湖の幽玄な静けさは誠に心にしみ入るほどである。ロッジで飲む熱いコーヒーの味もひとしおであった。再び車でルイス湖に戻り、午後1時半のバスにてヨッホ国立公園に向かう。州境を越えてブリチッシュ・コロンビア州に入り Takakkaw の滝を見る。雪溪、氷河をいただく高峯が巍々として送迎するうちに、清流が奔馬のごとく岩間より流れ出る自然の岩橋に出る。Kickling horse bridge の名の示すとおりの岩間よりの水勢はすさまじい。周囲のトドマツの林はあくまで青く、仰げば青空に屹立せる山頂にかかる千古の氷河は白い。さらにバスはエメラルド湖にいたる。対岸の雪溪は夕陽を浴び湖水の色は碧く澄み、静かなる自然の美しさはひ



写真 12 Moraine 湖 (カナジアン・ロッキー)

としおである。午後5時半ルイス湖に、6時発のバスにて Banff へ、さらに8時発のバスにて Calgary へと帰途につき、その夜 Calgary のホテルで疲れをいやした。

翌朝 Calgary からトロントに向かう機中、広大な湖沼地域を見る。ロッキー山の水は集まってここに原始の自然そのままの姿で横たわっている。数千の湖沼は宝石を散らしたごとく散在し、水多ければ大湖中に群島の散在する風景を現出し、減水すれば数百・数千の小湖沼となって現出する。まさにノアの大洪水を機上より見るようである。このような原始地域を約1時間飛んでスーペリオール湖上に出る。大洋のごとく広大な湖を西より東へ縦断するのにまた約1時間を要する。このような大自然をまのあたり見て初めてカナダの国土の広大さを知ることができる。

これらの湖沼の水はかくて5湖をつくりエリー湖とオンタリオ湖との間にナイアガラ瀑布を現出する。9月4日ピッツバーグから空路バッファローに出てこの世界の名瀑を観賞した。Niagara Fall の工場地域を走って午前11時米加国境をなす Rainbow bridge を渡ってカナダ国側からアメリカ滝ついでカナダ滝を見る。カナダ滝から上がる水煙はあいにく風下にあるクイン・ビクトリア公園の上に霧雨のごとく降り来り虹橋を滝上に現出する (Rainbow Bridge の名はこれから出る)。さらに瀑の下流に沿うて急湍泡立つ Whirl pool rapid, 急流さらに直角に方向を変え大渦巻 Niagara Gorge をエヤー・リフト上よりながめた。

7. 結 言

旅日記の内よりカナダでの見聞記は以上のごとく極めて貧弱なものであるが、広茫万里、空青く水清いカナダは私にとっては美しい思い出となっている。分析化学国際会議も1952年イギリスのオックスフォード、1956年ポルトガルのリスボンで行なわれ今回で第3回であり、その10年間における分析化学の進歩は誠に目覚ましいものである。1957年から4カ年間この IUPAC の分析化学部会の1委員の任にあったが、ここに退任に当たってますます同会の発展と日本の分析化学研究の隆盛を祈念する次第である。

(1961年11月11日受理)